

## 女子看護学生が持つ赤ちゃんイメージと新生児イメージの構造と特徴

中 越 利 佳\*

### Structure and Characteristics of Idea Possessed in Female Nursing Student for Baby and Neonate

Rika NAKAGOSHI

#### Abstract

The purpose of this study was to clarify the structure and the characteristics of ideas that female nursing students have concerning babies and neonates.

The survey was performed by self-writing for questionnaires.

Responses were obtained from 300 students (62.5% of total).

The questionnaires covered students' attributes, how frequently they associated with babies, ideas for babies and neonates, and the scale of their concerns and compassion for babies.

The results are shown as follows:

- 1) There were three factors concerning the idea of babies and neonates for nursing student as well as general university students, suggesting that there was no difference for the recognition of babies and neonates.
- 2) As a characteristic of nursing students, they had a significantly strong sense of concerns and compassion for babies and neonates.
- 3) The more strong sense of concerns and experiences in taking care of babies correlated with positive feelings of babies and neonates.

This study suggests that we need to educate nursing students to puts in the work in order to clarify the neonate idea more and to set opportunities for nursing students to have frequent contact with babies.

キーワード：イメージ構造 女子看護学生 赤ちゃん 新生児

#### 序 文

少子・核家族化の環境の中で育ってきた現代の若者は、生活体験に乏しく、乳児に接することが少なくなっている。ましてや新生児に接することが殆どない若者にとって、乳児と新生児を具体的にイメージすることは難しい現状である。看護学生もまた例外ではなく、母性看護学実習に出て初めてかかわる新生児に戸惑い、苦慮する学生の姿を見ることが多い。

K・Eボウルディング<sup>1)</sup>は、行動がイメージに依存しているとされ、過去経験の総合的結果としてイメージができあがると述べている。先行研究から多くの大学生の赤ちゃんイメージは、乳児後期の児をイメージしている

という報告がみられているように<sup>2),3)</sup>、乳児と接触する経験がない大学生にとって、彼らの赤ちゃんイメージは、TVなどのメディアからの影響を受けていると推察される。具体的な新生児のイメージを持つことができないまま、実習時に自分が描く乳児のイメージと同じ感覚で新生児と関わるのが、看護学生の戸惑いや、苦手意識を招いているのではないかと考えられた。

クラウスとケネルは<sup>4)</sup>自分が想像していた子どもに対する幻想を、現実に関わりあうとしたわが子と和解させなければならないとして、母親の想像していた理想的で完璧な子どもと、現実に関わりあう子どもの姿を融合させる必要性を述べている。我が子に対する幻想はTVなどでみるかわいらしい「乳児」と、現実に関わりあ

\*愛媛県立医療技術大学保健科学部看護学科

とした「新生児」の違いであると推察され、看護学生も実習を通して、同様な過程を経験していると考えられる。

濱<sup>9)</sup>は、看護学生は、母性看護学実習で初めて関わる新生児に戸惑いや否定的な感情を抱きながらも、実習が進行するにつれ、否定的感情を低下させ、児への感情を肯定的に変容させていくことを報告している。また深川<sup>6)</sup>、新生児イメージが肯定的な者ほど、新生児援助技術の一部向上につながることを報告している。

新生児を明確に認識していく為には、時間をかけて新生児とかかわることが必要であるが、限られた実習時間では難しい現状がある。実習効果を上げるためにも、実習開始までに新生児に対して具体的で、肯定的なイメージを持たせておくことが望ましいと考える。そのためには、母性看護学や小児看護学の講義が始まっていない看護学生の持っている赤ちゃんイメージと新生児イメージの構造の違いがあるのかどうか、新生児のイメージは赤ちゃんイメージよりも肯定的であるか、否定的なのか、さらにイメージ形成に関係する因子で、看護学生に特徴的なことは何なのかを明確にする必要があると考える。

赤ちゃんや新生児のイメージ形成に関するものとして松村<sup>7)</sup>、児に対する関わり意識や児との接触体験が影響すると述べている。また岩田<sup>8)</sup>は、児に対する関わりは「思いやり」すなわち共感能力が重要であることを述べている。

以上のことから本研究は、赤ちゃんや新生児のイメージとこれらのイメージ形成に関係する因子について、一般学生と比較することで、母性看護学や小児看護学の学習を始める前の看護学生が本来持っている特徴を明確化することを目的とした。看護学生の持つ赤ちゃんイメージ<sup>9)</sup>の報告はみられるが、母性看護学や小児看護学の学習開始以前の看護学生がイメージする「赤ちゃん（いわゆる乳児）」と「新生児」を一般学生と比較検討している研究はほとんどみられない。

本研究の目的は、母性看護学・小児看護学の学習開始以前の看護学生が持っている赤ちゃんや新生児のイメージ構造とこれらのイメージ形成に関連する因子について、一般学生と比較することによって、看護学生が本来持っている特徴を明確化することである。

(用語の定義)

1. イメージ：ここに思い浮かべられた事物・現象の心的映像
2. 思いやり<sup>10)</sup>：他者の気持ちを察し、その人の立場に立って考えること。その上でその気持ちや状態に共感もしくは同情すること。そして向社会的行動の動機づけ（その人の為に何かしようとする）となるもの。
3. 児に対する関わり意識<sup>8)</sup>：児に対して「可愛い、抱きしめたい、オムツ交換などの汚い世話はしたくない、よく泣くので関わりたくない」などについて、どのよ

うな意識を持っているかで、肯定的意識と否定的意識からなる。

4. 赤ちゃん：調査対象学生に、赤ちゃんを定義せず、学生自身が赤ちゃんと聞いてイメージした児。
5. 新生児：調査対象学生に、生後1週間頃の児と定義して、学生自身がイメージした児
6. 児：新生児、乳児および幼児の総称

## 方 法

### 1. 調査期間

2008年7月～10月

### 2. 調査方法

自記式質問紙法とした。学生が集合する講義教室において、研究の目的、倫理的配慮を口頭で説明した後、調査用紙を配布し無記名で記入されたものを回収する集合調査とした。

### 3. 調査対象者

A県内の看護を専攻する大学生と3年課程の看護専門学校生の1年生および一般大学生。

看護大学生および看護専門学校生のうち、母性看護学・小児看護学の講義を受講している学生および母性看護学・小児看護学実習を経験した学生は除外対象とした。対象者の均一化を図る為、21歳以上、男子学生、既婚学生と子どもを有する学生を対象者から除外した。

### 4. 調査内容

調査項目は、個人的属性と乳児・妊婦との接触経験(6項目)、赤ちゃんや新生児のイメージ(36対の形容詞項目SD法)、思いやり尺度<sup>10)</sup>(内田、2001の22項目)、児に対する関わり意識(松村2005の乳幼児に対する関わり意識尺度<sup>8)</sup>の一部に独自に作成した項目を加えた25項目)である。なお本研究の概念枠組みを図1に記す。

### 5. 分析方法

本研究は以下のような手順で分析を行った。

- 1) 基本的属性、接触体験は単純集計を行った。対象者全体の赤ちゃんや新生児のイメージ構造、児の対する関わり意識構造を明確にするために、因子分析より因子の抽出を行い、下位尺度得点を算出した。Cronbachの $\alpha$ 係数にて信頼性の検討を行った。思いやりは、全ての項目の得点総和を思いやり下位尺度得点とした。各下位尺度間の相関をpearsonの相関係数から確認した。
- 2) 赤ちゃんや新生児イメージ、児に対する関わり意識、思いやりの下位尺度得点に、看護学生と一般大学生で

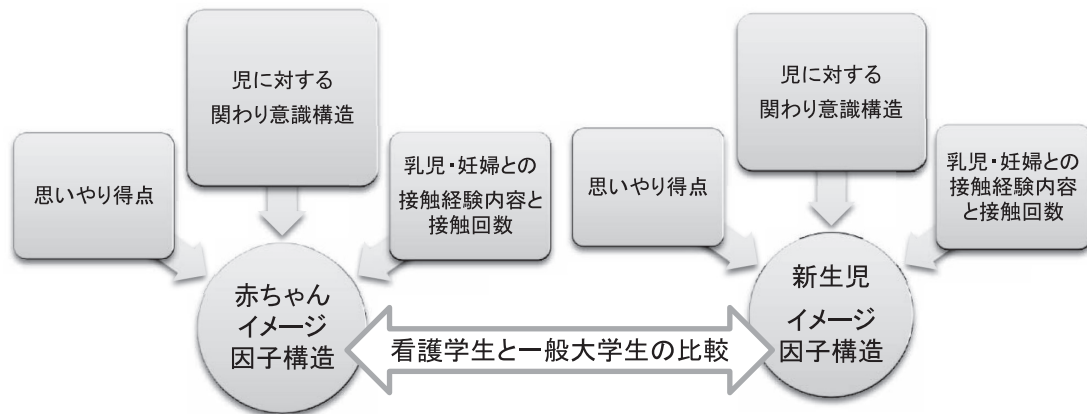


図1：本研究の概念枠組

違いがあるかどうかを確認するために、student's t-testを行った。

- 3) 看護学生と一般大学生を分けて、思いやりと赤ちゃん・新生児イメージ因子との関係性を、一元配置分散分析と Bonferroni 法による多重比較を行い、それぞれの特徴を確認した。
- 4) 看護学生と一般大学生別に、乳児・妊婦との接触経験の回数と赤ちゃん・新生児イメージとの関係性を一元配置分散分析と Bonferroni法による多重比較を行い、それぞれの特徴を確認した。

統計解析は統計ソフトSPSS(Ver13.0)を使用し、有意水準は5%以下とした。

## 6. 倫理的配慮

調査予定の学校責任者に、研究目的と研究倫理を文書及び口頭で説明し、許可を得た。学生には調査開始前に、調査の質問紙の回答は、無記名で、調査への参加は自由意志であること、答えたくないことについては、答えなくてよいこと、参加しても途中でやめてもよいこと、結果は統計的に処理し個人および学校は特定されないこと、研究目的以外に使用しないことを文書に明記し口頭でも説明した。退席しなかった学生に対して、質問紙を配布し、質問紙の回収をもって同意とした。なお本研究は、愛媛大学大学院医学系研究科看護学専攻研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

## 結 果

質問紙は、看護を専攻する大学生と看護専門学校生の一年生、及び一般大学生460人に配布し、422人から回答を得た。回収率は91.7%であった。回答に不備のあるものや、除外項目に該当する対象者を除き、有効回答の得られた300人(65.2%)を分析対象とした。

## 1. 対象者全体

### 1) 基本的属性

基本的属性人数は、表1に記す。学生の内訳は、看護学生165人で、そのうち大学看護学科生101人(33.7%)、看護専門学校生64人(21.3%)、一般大学生は135人(45%)であった。対象者の平均年齢は看護学生18.5(±0.51)歳、一般大学生18.7(±0.73)歳であった。きょうだいの人数の平均は看護学生2.4(±0.8)人、一般大学生2.4(±0.8)人、出生順位は第一子では、看護学生35.8%、一般大学生30.7%、第二子は看護学生15.4%、一般大学生11.3%、第三子は、看護学生2.7%、一般大学生2.7%第四子以降は、看護学生1.0%、一般大学生0.3%であった。

表1 対象者の基本属性

	看護学生	一般大学生	合計
人数	165	135	300
年齢			
18歳	81	62	143
19歳	83	54	137
20歳	1	19	20
兄弟の数			
1人	20	15	38
2人	78	60	138
3人	54	48	102
4人以上	13	12	22
出生順位			
第一子	105	90	195
第二子	45	33	78
第三子	8	8	16
第四子以降	3	1	4
無回答	4	3	7

### 2) 乳児・妊婦との接触経験

看護学生と一般大学生の乳児と妊婦との接触経験の頻度は表2に記す。看護学生と一般大学生共に「抱っこ」と「泣いている赤ちゃんをあやした」経験があるものが60%以上を超えていた。

### 3) 赤ちゃんイメージの因子構造

分析対象300人に対し、主因子法による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関、固有値、寄与率は表3に示す。3因子で24項目の全分散を説明する割合は46.68%であった。

第I因子は、13項目で構成されており、「丸い—四

表2 乳児・妊婦との接触経験 (%)

項目	接触回数	看護学生	一般大学生
抱っこ	無	19(12.0)	19(15.1)
	1回	8(5.1)	4(3.2)
	2回~3回	30(19.0)	22(17.4)
	それ以上	101(63.9)	81(64.3)
	合計人数	158(100)	126(100)
おむつ交換	無	107(65.6)	94(71.2)
	1回	12(7.4)	4(3.0)
	2回~3回	18(11.0)	14(10.6)
	それ以上	26(16.0)	20(15.2)
	合計人数	163(100)	132(100)
離乳食を食べさせた	無	110(67.9)	87(66.9)
	1回	13(8.0)	9(6.9)
	2回~3回	11(6.8)	12(9.2)
	それ以上	28(17.3)	22(16.9)
	合計人数	162(100)	130(100)
泣いている児をあやした	無	48(30.6)	46(39.0)
	1回	13(8.3)	6(5.1)
	2回~3回	44(28.0)	17(14.4)
	それ以上	52(33.1)	49(41.5)
	合計人数	157(100)	118(100)
服の着替え	無	99(61.5)	79(60.8)
	1回	5(3.1)	5(3.8)
	2回~3回	17(10.6)	17(13.1)
	それ以上	40(24.8)	29(22.3)
	合計人数	161(100)	130(100)
妊婦と親しく会話	無	91(58.4)	62(49.2)
	1回	8(5.1)	13(10.3)
	2回~3回	23(14.7)	19(15.1)
	それ以上	34(21.8)	32(25.4)
	合計人数	156(100)	126(100)

表3 赤ちゃんイメージ因子構造

項目	因子負荷量			共通性	M	SD
	I	II	III			
N=300						
<外見性> $\alpha=0.85$						
丸い—四角い	0.77	-0.10	-0.07	0.48	4.68	0.60
明るい—暗い	0.74	-0.10	0.12	0.54	4.36	0.79
初々しい—ひねた	0.71	-0.04	-0.03	0.49	4.76	0.61
やわらかい—硬い	0.67	0.01	-0.22	0.56	4.88	0.41
甘い—すっぱい	0.61	-0.18	0.20	0.38	3.98	0.93
暖かい—冷たい	0.61	0.18	-0.14	0.56	4.81	0.49
繊細な—武骨な	0.55	-0.02	0.11	0.36	4.44	0.82
みずみずしい—かさかさ	0.50	-0.14	0.01	0.29	4.61	0.69
白い—白くない	0.47	-0.10	0.12	0.30	4.13	0.94
すがすがしい—うっとうしい	0.42	0.17	0.23	0.43	3.75	0.98
のびのびとした—こせこせした	0.41	0.22	-0.03	0.40	4.41	0.76
元気な—元気のない	0.39	0.19	0.01	0.37	4.55	0.65
生き生きとした—生気のない	0.36	0.30	0.00	0.42	4.70	0.57
<好感性> $\alpha=0.79$						
めざわりでない—めざわりな	-0.17	0.76	0.02	0.45	4.57	0.86
楽しい—苦しい	-0.06	0.69	0.06	0.42	4.34	0.82
怖くない—怖い	-0.05	0.69	-0.01	0.40	4.28	1.03
いとoshii—憎らしい	0.12	0.63	-0.01	0.49	4.71	0.57
親しみやすい—親しみにくい	-0.02	0.61	0.23	0.53	4.04	0.94
ほほえましい—憎らしい	0.39	0.41	-0.15	0.60	4.82	0.51
単純な—複雑な	-0.13	0.38	0.03	0.24	3.56	1.26
うれしい—悲しい	0.36	0.38	-0.04	0.47	4.54	0.74
<行動性> $\alpha=0.67$						
きちんとした—だらしない	0.13	0.02	0.73	0.47	3.21	0.92
丁寧な—雑な	0.16	-0.02	0.66	0.43	3.32	0.95
落ち着いた—落ち着きのない	-0.28	0.20	0.43	0.27	2.54	1.11
因子間相関						
	I	II	III			
	—	0.60	0.19			
	II	—	0.24			
	III	0.19	0.24	—		
固有値	7.31	2.16	1.74			
寄与率	30.44	8.99	7.24			
累積寄与率(%)	30.44	39.44	46.68			

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

角い」「明るい—暗い」「初々しい—ひねた」といった児の容姿や外見的特徴からとらえた内容を示す形容詞対が高い負荷量を示しており「外見性」と命名した。

第II因子は、8項目で構成され、「めざわりでない—めざわりな」「楽しい—苦しい」「怖くない—怖い」「いとoshii—憎らしい」など児に対する肯定的な形容詞対が高い負荷量を示した為、「好感性」と命名した。

第III因子は、「きちんとした—だらしない」「丁寧な—雑な」「落ち着いた—落ち着きのない」の3項目で

構成され、児の行動や活動を捉えたイメージであると考へ、「行動性」と命名した。

3つの下位尺度に相当する項目の平均点を算出し、「外見性」下位尺度得点 (M4.47, SD0.44), 「好感性」下位尺度得点 (M4.36, SD0.55), 「行動性」下位尺度得点 (M3.02, SD0.77) とした。内的整合性を検討するために各下位尺度の  $\alpha$  係数を算出した。「外見性」で  $\alpha=0.85$ , 「好感性」で  $\alpha=0.79$ , 「行動性」で  $\alpha=0.67$  と妥当であった。

#### 4) 新生児イメージの因子構造

分析対象300人に対し、主因子法・Promax回転による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関は、表4に示す。各因子の固有値、寄与率は表4のとおりであり、3因子で25項目の全分散を説明する割合は51.31%であった。

第I因子は、10項目で構成されており、「うれしい—悲しい」「めざわりでない—めざわりな」「いとoshii—憎らしい」といった肯定的な形容詞対が高い負荷量を示しており「好感性」と命名した。

第II因子は、12項目で構成され、「丸い—四角い」「甘い—すっぱい」「明るい—暗い」など児の容姿や外見的特徴からとらえた内容を示す形容詞対が高い負荷量を示した為、「外見性」と命名した。

第III因子は、「きちんとした—だらしない」「丁寧な—雑な」「落ち着いた—落ち着きのない」の3項目で構成され、児の行動特徴を示す項目が高い負荷量を示した為「行動性」と命名した。

3つの下位尺度に相当する項目の平均点を算出し、「好感性」下位尺度得点 (M4.52, SD0.54), 「外見性」下位尺度得点 (M4.26, SD0.58), 「行動性」下位尺度得点 (M3.19, SD0.85) とした。内的整合性を検討するために各下位尺度の  $\alpha$  係数を算出した。「好感性」で  $\alpha=0.88$ , 「外見性」で  $\alpha=0.87$ , 「行動性」で  $\alpha=0.73$  と十分な値が得られた。

#### 5) 児に対する関わり意識の構造

分析対象300人に対し、主因子法による因子分析を行った。Promax回転後の最終的な因子パターンと因子間相関、各因子の固有値、寄与率は表5のとおりであり、3因子で20項目の全分散を説明する割合は54.98%であった。

第I因子は、7項目で構成されており、「自分の表情を豊かにする」「自分を優しい人間にする」「かわいいので抱きしめたい」といった育児によって、自分自身も成長すると肯定的にとらえた内容が高い負荷量を示しており「人間性成長」と命名した。

第II因子は、9項目で構成され、「活動が制限されてつまらない」「乳幼児と一緒に気分転換できない」「乳幼児と関わりと疲れる」など育児を遂行する際に

表4 新生児イメージ因子構造

項目	因子負荷量			共通性	M	SD
	I	II	III			
<b>&lt;好感性&gt; <math>\alpha=0.88</math></b>						
うれしいー悲しい	0.93	-0.15	-0.08	0.65	4.65	0.65
めざわりでないーめざわりな	0.82	-0.15	0.06	0.55	4.43	0.87
いとおしいー憎らしい	0.81	0.01	-0.04	0.63	4.71	0.63
ほほえましいー憎らしい	0.73	0.06	-0.01	0.64	4.71	0.63
すばらしいーひどい	0.67	-0.06	0.09	0.46	4.40	0.79
怖くないー怖い	0.54	-0.01	0.03	0.36	4.17	1.10
繊細なー武骨な	0.52	0.01	0.07	0.36	4.55	0.74
暖かいー冷たい	0.48	0.28	-0.05	0.56	4.65	0.67
初々しいーひねた	0.45	0.22	-0.01	0.48	4.72	0.60
すがすがしいーうっとおしい	0.40	0.19	0.24	0.45	4.19	0.93
<b>&lt;外見性&gt; <math>\alpha=0.87</math></b>						
丸いー四角い	-0.16	0.79	0.08	0.56	4.48	0.79
甘いーすっぱい	-0.12	0.64	0.21	0.47	3.91	0.98
明るいー暗い	0.10	0.64	0.11	0.54	4.31	0.89
やわらかいー硬い	-0.01	0.63	0.03	0.55	4.71	0.67
面白いーつまらない	0.08	0.61	-0.09	0.52	4.09	0.90
活発なーおとなしい	-0.10	0.59	-0.31	0.38	3.87	1.20
白いー白くない	-0.15	0.57	0.14	0.33	3.75	1.23
みずみずしいーかさかさ	0.10	0.54	0.01	0.41	4.48	0.82
元気なー元気のない	0.16	0.52	-0.12	0.53	4.44	0.79
のびのびとしたーこせこせした	0.26	0.49	-0.02	0.54	4.35	0.87
生き生きとしたー生氣のない	0.26	0.45	-0.16	0.53	4.45	0.78
楽しいー苦しい	0.36	0.39	-0.04	0.58	4.27	0.87
<b>&lt;行動性&gt; <math>\alpha=0.73</math></b>						
きちんとしたーだらしない	0.06	0.04	0.73	0.56	3.29	0.94
丁寧なー雑な	0.07	0.02	0.71	0.53	3.36	1.00
落ち着いたー落ち着きのない	-0.03	-0.03	0.59	0.32	2.94	1.21
<b>因子間相関</b>						
	I	II	III			
I	—	0.66	0.26			
II	0.66	—	0.21			
III	0.26	0.21	—			
固有値	8.80	2.17	1.86			
寄与率	35.18	8.68	7.45			
累積寄与率(%)	35.18	43.86	51.31			

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

生じる拘束感を表現した内容が高い負荷量を示した為、「育児拘束感」と命名した。

第Ⅲ因子は、「乳幼児と関わっている時が自分らしい」「乳幼児に一番の関心がある」「乳幼児と一緒に楽しい」「自分が親になることがイメージできる」の4項目で構成された。児に対して関心が高く、児との関わりを楽しむ内容がみられた為、「親性準備」と命名した。

因子間相関から、第Ⅱ因子は、第Ⅰと第Ⅲ因子と負の相関がみられ、逆転因子であった。したがって、第Ⅱ因子の「育児拘束感」の因子項目を逆転項目であると考え、得点換算し3因子の得点が高いほど児に対する関わり意識が高くなるように操作した。

児に対する関わり意識尺度の3つの下位尺度に相当する項目の平均点を算出し、「人間性成長」下位尺度得点(M4.00, SD0.80), 「育児拘束感」下位尺度得点(M3.56, SD0.69), 「親性準備」下位尺度得点(M3.29, SD0.84)とした。

内的整合性を検討するために各下位尺度の $\alpha$ 係数を算出した。「人間性成長」 $\alpha=0.89$ , 「育児拘束感」 $\alpha=0.84$ , 「親性準備」 $\alpha=0.73$ と十分な値を示した。

## 6) 思いやり得点

分析対象300人に対し、思いやり尺度の22項目について、それぞれ5段階で得点化し、合計得点を思いやり得点とした。対象者の思いやり得点の平均点は、75.90±10.31点、最高得点106点、最低得点39点であった。

表5 児に対するかかわり意識の構造

項目	因子負荷量			共通性	M	SD
	I	II	III			
<b>&lt;人間性成長&gt; <math>\alpha=0.89</math></b>						
自分の表情を豊かにする	0.95	0.07	-0.13	0.69	4.18	1.06
自分を優しい人間にする	0.92	0.11	-0.13	0.67	4.09	1.06
かわいいで抱きしめたい	0.79	-0.06	-0.02	0.63	4.32	1.06
自分も成長する	0.78	0.05	-0.05	0.56	4.30	0.92
気持ちが安定する	0.48	0.03	0.24	0.50	3.20	1.09
一緒にいると毎日に充実感がある	0.46	0.07	0.43	0.54	3.65	1.10
いとおいしく守ってあげたい	0.43	-0.14	0.25	0.55	4.24	0.96
<b>&lt;育児拘束感&gt; <math>\alpha=0.84</math></b>						
活動が制限されてつまらない	-0.05	0.85	0.13	0.58	2.15	1.08
乳幼児と一緒にでは気分転換できない	0.05	0.73	-0.04	0.50	2.17	1.03
乳幼児とかかわると疲れる	-0.05	0.69	-0.06	0.48	2.75	1.11
乳幼児と一緒にでは我慢することが多い	0.11	0.65	-0.16	0.30	3.08	0.98
よく泣くので関わりたくない	-0.21	0.64	-0.05	0.68	1.88	1.03
自分の思い通りにできない	-0.23	0.53	0.03	0.24	2.62	0.97
おむつ交換など汚い世話はしたくない	-0.02	0.41	-0.11	0.32	2.11	0.97
自分は乳幼児とかかわることに適していない	-0.01	0.41	-0.34	0.50	2.44	1.12
世間から取り残される	-0.03	0.38	-0.09	0.27	2.01	1.01
<b>&lt;親性準備&gt; <math>\alpha=0.73</math></b>						
乳幼児と関わっている時が自分らしい	-0.13	0.06	0.84	0.45	3.08	1.03
乳幼児に一番の関心がある	-0.12	0.06	0.77	0.40	2.93	1.16
乳幼児と一緒に楽しい	0.10	-0.13	0.57	0.51	4.20	0.96
自分が親になることがイメージできる	0.06	0.06	0.54	0.33	2.98	1.36
<b>因子間相関</b>						
	I	II	III			
I	—	-0.53	0.59			
II	-0.53	—	-0.63			
III	0.59	-0.63	—			
固有値	7.29	2.23	1.47			
寄与率	36.47	11.17	7.33			
累積寄与率(%)	36.47	47.64	54.98			

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

## 7) イメージ因子、児に対する関わり意識、思いやりの各下位尺度間相関

赤ちゃんイメージと新生児イメージの下位因子間の相関は、「外見性」( $r=0.62$ )「好感性」( $r=0.76$ )「行動性」( $r=0.65$ )と有意な正の相関を示した。「好感性」は「人間性成長」と $r=0.44$ , 「育児拘束感」(逆転因子)と $r=0.51$ , 「親性準備」と $r=0.49$ であり、いずれも有意な正の相関を示した。「思いやり得点」は、「育児拘束感」(逆転因子)と $r=0.33$ , 「親性準備」と $r=0.30$ と有意な正の相関を示した。

## 2. 看護学生と一般大学生の比較

看護学専攻の大学生と専門学校生を合わせて、看護学生とし(165人, 55%), 一般大学生(135人, 45%)と比較する。

### 1) 赤ちゃんイメージ因子得点と児に対する関わり意識の下位因子得点、思いやり得点の比較

看護学生(165人)と一般大学生(135人)の赤ちゃんイメージ因子得点と児に対するかかわり意識の下位因子得点、思いやり得点の比較は、表6に記す。看護学生と一般大学生において有意な差がみられたものは、「育児拘束感」【 $t=3.42, p<.01$ 】、「親性準備」【 $t=1.98, p<.05$ 】、「思いやり得点」【 $t=12.14, p<.01$ 】であった。いずれも看護学生が高い得点を示した。赤ちゃんイメージ因子得点は、看護学生と一般大学生に有意な得点差はみられなかった。

### 2) 思いやり得点群別イメージ因子の比較

対象者全体の思いやり得点分布を4分位し、25%マイル値以下の得点(68点以下)を低得点群、75%タイ

表6 看護学生と一般大学生のイメージ因子・思いやり得点・  
児に対するかかわり意識の比較 N=300

下位尺度	看護学生(n=165)		一般学生(n=135)		t値
	M	SD	M	SD	
赤ちゃん外見性	4.48	0.44	4.45	0.44	0.72
赤ちゃん好感性	4.38	0.50	4.32	0.61	0.91
赤ちゃん行動性	3.00	0.76	3.05	0.78	-0.55
新生児好感性	4.54	0.51	4.50	0.57	0.61
新生児外見性	4.26	0.56	4.26	0.61	0.02
新生児行動性	3.20	0.87	3.19	0.83	0.09
人間性成長	4.02	0.79	3.97	0.80	0.47
育児拘束感	3.68	0.63	3.41	0.73	3.42 **
親性準備	3.38	0.82	3.18	0.86	1.98 *
思いやり得点	81.34	9.85	69.59	6.56	12.14 **

\*p<.05, \*\*p<.01

Student's-t-test

ル値以上の得点 (82点以上) を高得点群, それ以外を  
中得点群とし, 看護学生 (165人) と一般大学生 (135  
人) 別に, イメージ因子得点の比較を行った。結果は  
表7-1, 表7-2である。一般大学生は, 3群間の  
イメージ因子得点に有意差は認められなかった。しか  
し看護学生は, 「赤ちゃん外見性」「赤ちゃん好感性」「新  
生児好感性」「新生児外見性」に有意差がみられた。  
多重比較の結果, いずれも高得点群が中得点群, 低得  
点群に比べ有意にイメージ得点が高かった。

表7-1 看護学生・思いやり  
得点群別イメージの比較

下位尺度	思いやり得点	F値	
		M	SD
赤ちゃん外見性	高得点群	4.65	0.31
	中得点群	4.38	0.49
	低得点群	4.39	0.38
赤ちゃん好感性	高得点群	4.57	0.38
	中得点群	4.28	0.50
	低得点群	4.10	0.69
赤ちゃん行動性	高得点群	3.10	0.75
	中得点群	2.94	0.78
	低得点群	2.91	0.63
新生児好感性	高得点群	4.69	0.40
	中得点群	4.46	0.55
	低得点群	4.29	0.60
新生児外見性	高得点群	4.38	0.58
	中得点群	4.22	0.52
	低得点群	3.95	0.68
新生児行動性	高得点群	3.15	0.78
	中得点群	3.24	0.94
	低得点群	3.09	0.88

\*p<.05, \*\*p<.01  
ANOVA, Bonferroni

表7-2 一般大学生・思いやり  
得点群別イメージの比較

下位尺度	思いやり得点	F値	
		M	SD
赤ちゃん外見性	高得点群	4.12	0.60
	中得点群	4.47	0.42
	低得点群	4.42	0.46
赤ちゃん好感性	高得点群	4.75	0.00
	中得点群	4.35	0.58
	低得点群	4.27	0.67
赤ちゃん行動性	高得点群	3.33	0.00
	中得点群	3.08	0.82
	低得点群	2.99	0.74
新生児好感性	高得点群	4.65	0.07
	中得点群	4.54	0.51
	低得点群	4.42	0.65
新生児外見性	高得点群	4.21	0.65
	中得点群	4.29	0.62
	低得点群	4.21	0.60
新生児行動性	高得点群	2.83	0.24
	中得点群	3.17	0.85
	低得点群	3.23	0.81

ANOVA (n.s.)

### 3) 乳児・妊婦との接触経験とイメージ因子の関連

看護学生と一般大学生を分けて, 乳児・妊婦との接  
触経験による赤ちゃんや新生児のイメージ得点比較を  
行った。その結果, 一般大学生に有意差がみられたの  
は, 「おもむつ交換」【F(3,128)=4.44 p<.01】で,  
Bonferroniの多重比較の結果, 2~3回経験した者が  
経験なしのものに比べて有意に「新生児外見性」得点  
が低かった(p<.05)。

看護学生に有意差がみられたものは, 「離乳食を食べ  
させた」と「妊婦と親しく会話」であった。「離乳食  
を食べさせた」で有意差がみられたのは「赤ちゃん外  
見性」【F(3,158)=3.26 p<.05】で, 3回以上経験  
したものが経験なしのものよりも有意に得点が高かつ  
た(p<.05)。「妊婦と親しく会話」で有意な差がみら  
れたのは「新生児行動性」【F(3,152)=3.71p<.01】  
で, 2~3回話をしたものは, 経験なしのものに比べ  
有意に低い得点であった (p<.05)。また有意差は認  
められなかったが, 看護学生の「おもむつ交換」で「新  
生児外見性」【F(3,159)=1.19】は, 3回以上経験し  
た者が, 経験なしの者に比べ, 高い得点である傾向が  
みられた。

## 考 察

対象学生全体の赤ちゃんや新生児のイメージ因子構造  
は同じであり, 赤ちゃんや新生児を同じものとして認識  
していることが明らかになった。イメージ因子得点を看護  
学生と一般学生で比較しても, 有意差は認められず,  
看護学生だから赤ちゃんイメージや新生児イメージをよ  
り肯定的に捉えているとは言えないことが示された。

少子化により, 身近に新生児に接することが少なく,  
まして生後一週間前後は, 病院に入院しており, 新生児  
を目の当たりにする機会はほとんどない。またメディア  
も, 新生児の映像を流す機会は少なく, 新生児を具体的  
にイメージすることができにくい状況であると考えられ  
た。したがって母性・小児看護学の教育過程において,  
学生の持つ赤ちゃんイメージから, より明確に新生児を  
認識できるように働きかけていく必要性が示唆される。

児に対する関わり意識 (人間性成長, 育児拘束感, 親  
性準備) と思いやり得点を, 看護学生と一般大学生で比  
較すると, 「育児拘束感」(逆転因子, 得点が高いほど拘  
束感をもっていない) と「親性準備」, 「思いやり得点」  
において, 看護学生が有意に高い得点を示した。このこ  
とは, 看護学生が一般大学生に比べ「思いやり」いわゆ  
る共感能力が高く, 児に対する関わり意識も高いことが  
明らかになった。

調査対象学生全体の思いやり得点を高得点群, 中得点  
群, 低得点群に分け, 看護学生と一般大学生別に, 思い  
やり得点群の赤ちゃんや新生児のイメージ因子得点を比  
較した結果, 一般大学生では, 有意差はみられなかった  
のに対し, 看護学生では, 高得点群が中得点・低得点群  
に比べ, 「赤ちゃんや新生児の外見性・好感性イメージ」  
が有意に高かった。先行研究において, 看護学生の子ど  
ものイメージや赤ちゃんイメージがおおむね肯定的であ  
る傾向<sup>11)・12)</sup>がみられるのは, 看護学生の特徴として思い  
やりが強いことが関連していると推察される。

妊婦との接触経験とイメージ因子との関係性では、看護学生に有意差がみられた。2回～3回「妊婦と親しく会話」経験群が経験なし群に比べ、「新生児行動性」イメージ得点が有意に低かった。西原ら<sup>13)</sup>は、妊婦は子どもに対する期待と不安を織り交ぜた心境であり、育児の楽しさや喜びをイメージしている反面、育児への否定的感情を持っている。実際の育児中の母親よりもより強く、育児の辛さや大変さをイメージしていると報告し、看護学生の新生児イメージに影響を与えたと推察した。

野村は<sup>14)</sup>、「行動性」イメージの持つ否定的な側面は、児の落ち着きのなさやうるささ、感情的で、わがまま、汚さなどがあり、子どもと接触経験を通して多面的に理解が深まることでイメージが形成される側面があると述べ、育児への不安と期待が入り混じった複雑な感情を持っている妊婦の話を書くことが、看護学生の「新生児行動性」イメージに影響を与えたものと推察する。

加えて看護学生の特徴である「思いやり」の強さが妊婦の話を書くことにより、妊婦の不安な感情により共感したものと考えられる。「新生児行動性」イメージは、やや低い得点として現れたが、妊婦と関わる経験は、将来看護職として妊婦を支援するための動機づけとなるものであると考えられ、積極的に取り入れていく必要性が示唆される。

乳児との接触経験とイメージ因子との関連では、一般学生が「おむつ交換」を2～3回経験した者が経験なしの者に比べ、「新生児外見性」イメージ得点が有意に低かったが、看護学生では、「離乳食」経験で、3回以上経験した者が経験なしの者に比べて「赤ちゃん外見性」イメージが有意に高い得点を示した。また有意差は認められなかったが、「おむつ交換」を3回以上経験した学生は、経験なしの者に比べ、「新生児外見性」イメージ得点が高い傾向を示していた。「離乳食を食べさせる」「おむつ交換」など児の日常生活援助を経験することは、看護学生の赤ちゃんや新生児イメージを肯定的に高めることに有効であることが推察できる。

以上のことから、今後の母性・小児看護学の教育過程において、看護学生の持っている赤ちゃんイメージから新生児をより明確化できるような働きかけが必要であることが示唆される。また児に対する関わり意識や思いやりが強いことは、看護学生の特徴であり、妊婦との関わりや児の日常生活援助経験は、赤ちゃんや新生児イメージの形成に好影響を及ぼすと推察され、積極的に取り入れていく必要性が示唆される。

## 結 語

母性・小児看護学の学習開始以前の看護学生が持つ赤ちゃんイメージと新生児イメージの構造に違いは見られ

ず、赤ちゃんと新生児の認識は同じものであった。しかし、児に対するかかわり意識や思いやりが強いことは、看護学生の特徴であり、「思いやり」の強さが、赤ちゃんと新生児の「好感性」「外見性」イメージに関連することが示された。加えて児の日常生活援助経験や妊婦との関わりが看護学生の赤ちゃんや新生児イメージ形成に影響を与えることが明らかになった。

## 引用文献

- 1) K. Eボウルディング(1984)：ザ・イメージ 生活の知恵・社会の知恵 (大川信明訳), 5-7, 誠信書房
- 2) 林田りか, 中淑子, 草野美根子(2002)：入学前の看護学学生の子どものに対する接触および行為体験の実態, 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要, Vol.3, 85-91
- 3) 中嶋一恵, 中淑子, 林田りか(2005)：小児看護学初学者が子どもに抱くイメージの構造, 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部紀要, 第6巻, 49-58
- 4) クラウス・ケネル(1985)：親と子のきずな, 90, 医学書院
- 5) 濱耕子(2004)：母性看護を習得する学生の対児感情の推移と関連因子, 母性衛生Vol45 No.2, 170-179
- 6) 深川ゆかり(1989)：学生がいだく新生児のイメージが新生児援助技術に与える影響(第2報), 第20回日本看護学会集録集看護教育83-85
- 7) 松村恵子(2005)：母性意識を考える, 文芸社
- 8) 岩田崇, 深谷和子(1986)：良き母親とは何か—親準備性の研究のまとめに代えて—母子相互作用の臨床応用に関する総合的研究, 1985年度研究報告書, 217-222
- 9) 濱耕子(2002)：看護学生の持つ「赤ちゃん」イメージ内容の検討—SCTを用いた試み, 母性衛生Vol.43 No3, 144
- 10) 内田由紀子, 北山忍(2001)：思いやり尺度の作成と妥当性の検討, 心理学研究, 第72巻, 第4号, 275-28
- 11) 細野恵子, 上野美代子(2008)：小児看護学実習後の看護学生の乳幼児に対するイメージ, 市立名寄短期大学紀要Vol.41, 25-31
- 12) 河上智香, 藤原千恵子, 上野恵美子(2003)：4年生看護系大学の学生が持つ子どものイメージの構造, 第34回日本看護学会集録集看護教育, 103-105
- 13) 西原由紀乃, 小林康江, 遠藤俊子(2008)：妊婦が抱く育児に対するイメージ—第1子を育児中の母親との比較から—, 母性衛生, Vol48(4), 462-470
- 14) 野村幸子(2007)：子どもとの接触体験からみた看護学生の子どものイメージ, 人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌, 7(1), 169-180

## 要 旨

本研究の目的は、20歳以下の女子看護学生と一般女子大学生の比較から、看護学生の赤ちゃんと新生児のイメージ構造と特徴を明らかにすることである。

調査方法は、自記式質問紙法とし、有効回答の得られた300名を分析対象者とした（有効回答率65.2%）。調査内容は基本的属性、乳児との接触経験、赤ちゃんと新生児のイメージ、児に対する関わり意識尺度、思いやり尺度である。

看護学生の赤ちゃんと新生児のイメージ因子構造は、一般大学生と同じ3因子構造を示し、赤ちゃんと新生児の認識に違いがなかった。

看護学生の特徴として、思いやりと児に対する関わり意識が有意に高かった。思いやりが高い学生ほど、また児の日常生活援助を多く経験した学生ほど、赤ちゃんと新生児の肯定的イメージが有意に高かった。

教育過程において、新生児イメージをより明確にできるように働きかけること、児の日常生活援助経験を積極的に取り入れていく必要性が示唆された。

## 謝 辞

本研究のまとめに際し、御指導・御助言を頂きました諸先生方に心より感謝申し上げます。なお本研究は平成20年度愛媛大学大学院医学系研究科に提出した修士論文の一部を加筆修正したものである。